

『御主ゼズ・キリシトの御パツシヨンのこと』 における四福音書の編集

西牟田 祐樹

Created-at: 2026/08/14

はじめに

キリシタン時代には聖書の日本語翻訳が行われたことが知られているが、その全体を伝える日本語訳聖書は現存していない。しかし、福音書をはじめとする聖書本文の部分訳は、キリシタン文献の中に断片的に伝えられている。その重要な一例が、『スピリツアル修行』に収められた「御主ゼズ・キリシトの御パツシヨンのこと」である。

同文は冒頭で、

これ四人のエワンゼリシタ記録のうちより選び集めて翻訳せしものなり

とその成立方法を明示している。すなわち、これは特定の一福音書における受難物語の翻訳ではなく、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書から受難記事を選択し、一つの連続した物語として再構成したテキストである。海老沢有道はすでに本テキストについて注釈で四福音書との対応を指摘しているが、本稿ではさらに細かく本文を区分し、個々の箇所について、どの福音書の本文と最もよく対応するかを比較することを試みる¹。その目的は、単に聖書章節の対応表を作成することではなく、「御主ゼズ・キリシトの御パツシヨンのこと」が四福音書をどのような原理によって選択・編集したのかを明らかにすることにある。以下、本稿では「御主ゼズ・キリシトの御パツシヨンのこと」を「御パッション」と略記する。

使用本文と比較方法

本稿における「御パッション」の本文には、スピリツアル修行 キリシタン文学双書・キリシタン研究第三十一輯、海老沢有道編著、教文館、1994を使用した。四福音書との対応箇所の区分には、佐藤研編訳『福音書共観表』を主として利用した。本稿では、「御パッション」における四福音書の記事の選択と編集を検討する

¹バレット写本所収の福音書翻訳についての詳細な比較研究として、鈴木・梅崎・青木（1997）、鈴木・青木（1998）、鈴木・青木（1999）がある。

ため、ヴルガタの四福音書本文を第一の比較対象とする。ヴルガタ本文については便宜上 Weber-Gryson 版を参照し、対応関係を明確にする必要がある場合には筆者による逐語的な日本語訳を併記する。Nestle-Aland 第 28 版 (NA28) は翻訳元を判定するための直接の比較本文とはせず、ヴルガタと現代のギリシア語校訂本文との異同を確認するための補助的資料として用いる。なお、先行研究²が指摘するように、キリシタンの日本語訳聖句にはヴルガタ本文と必ずしも一致しない例も存在するため、本稿は Weber-Gryson 版そのものを「御パッション」の直接の底本と仮定するものではない。

ただしここで注意しなければならないのは、マタイとマルコ、とりわけ受難物語における共観福音書間の一致度が非常に高いことである。同一またはほぼ同一の語彙・構文を持つ箇所について、現存する日本語訳だけから翻訳者が直接どちらを利用したのかを確定することはできない。そのため本稿では、物語の配列だけではなく、語彙、個々の描写、人物名の明示、他方の福音書に存在しない表現などを手掛かりとして、可能な範囲で対応を判断する。したがって、以下で「マタイを使用した」「マルコを使用した」などと記す場合にも、特に共観福音書間の平行箇所については、必ずしも直接の翻訳元を確定したことを意味せず、現存本文との比較において最も近い対応関係を示すものである。また、キリシタン時代の日本語聖書翻訳にはポルトガル語などの中間言語が関係した可能性も考慮する必要があるが、本稿では翻訳経路そのものの確定を目的とせず、ヴルガタにおける四福音書本文との比較を中心とする。

以下、特に断らない限り、「マタイ 26 章」「マルコ 14 章」などの福音書本文への言及は、Weber-Gryson 版ヴルガタの当該箇所を比較対象とする。

比較照合からみた全体的傾向

「御パッション」の最も顕著な特徴は、四福音書の記事を均等に並置するのではなく、それらを一つの連続した受難物語となるように再構成している点にある。現段階の照合では、マタイ福音書との対応が受難物語の各所に頻繁に認められ、全体として重要な位置を占めていることは確かである。しかし、その編集方法を単純に「マタイを骨格とし、他の福音書の記事を補充するもの」と捉えることは適切ではない。実際には、場面ごとに中心となる福音書が異なり、ルカやヨハネが叙述の構造そのものを与えている箇所も存在する。たとえば裁判記事では、アンナスによる尋問にはヨハネ 18 章、カイアファ邸での審理にはマタイ 26 章およびマルコ 14 章、さらに夜明けの会議にはルカ 22 章 66 – 71 節が利用されており、複数福音書の記事を順次組み合わせることによって一連の裁判叙述が形成されている。

また、「御パッション」における調和は、記事や場면을接続する水準だけにとどまらない。聖餐ではマタイの記事の内部にルカ 22 章 19 節の「これを私の記念として行え」に対応する文言が取り込まれ、ゲツセマネではルカ 22 章 45 節の「悲しみのため」とマタイ 26 章 43 節の「目が重くなっていた」に対応する表現が一文の内部で融合されている。さらに、ルカの記事の出来事の順序を組み替える場合もあり、編集は記事・文・句・叙述順序という複数の水準で行われている。このことから、「御パッション」は四福音書の記事を単に選択して連結したものと

² 郷談 —Codices Reginensis Latini.459 の解釈から、鈴木広光、古典学の再構築、No.8, p.76, 2000.

うより、それぞれの福音書から適切と判断された要素を取り出し、一つの受難物語として再構成した調和本文とみるべきである。

さらに注意すべきは、現存本文のすべてが四福音書のみから説明できるとは限らないことである。ユダの死について「首をくくり、片腹破れて死しける」とする記述のうち、前半はマタイ 27 章 5 節に対応するが、「片腹破れて」という要素は四福音書にはなく、使徒言行録 1 章 18 節に対応する伝承を想起させる。したがって、冒頭の「四人のエワンゼリシタ記録のうちより選び集めて翻訳せしものなり」という自己説明は作品の基本的な編集方針を示すものではあるものの、実際の本文形成には、四福音書以外の聖書伝承、あるいはそれらをすでに調和した中間資料が関与している可能性も残される。

以上から、「御パッション」は特定の一福音書の翻訳を基礎として他福音書を補足的に参照した作品というより、四福音書の複数の記事を場面ごとに選択し、ときには一文・一句の水準にまで分解して再結合し、必要に応じて順序や表現を変更することによって形成された受難調和本文と理解するのが適切であると考ええる。

最後の晩餐まで

殺害計画・塗油・ユダの裏切り

冒頭の殺害計画はマタイ 26 章 1-5 節、塗油の記事はマタイ 26 章 6-13 節に対応する。続くユダの死については、福音書記事だけではなく、『使徒行伝』の記述が利用されている。「御パッション」はユダが「首をくくり、片腹破れて死しける」と書かれているが、ヴルガタのマタイ 27 章 5 節が記すのは *laqueo se suspendit*（「縄で自らを吊った」）までであり、マルコ・ルカ・ヨハネにはユダの死そのものの記事がない。これに対して、使徒言行録 1 章 18 節には *suspensus crepuit medius* とあり、吊られたユダの身体が裂けたことが記される。したがって「首をくくり、片腹破れて」という表現は、少なくとも内容上、マタイ 27 章 5 節の絞首伝承と使徒言行録 1 章 18 節の身体破裂伝承とを結合したものとして説明できる。ただし、これが編者による使徒言行録の直接参照によるものか、すでに両伝承を調和した中間資料を介したものかは、なお検討を要する。

過越の準備

過越の準備では、弟子二人を遣わすという部分がマルコ 14 章 12-14 節に近い。「ゼズスみ弟子二人に宣く」は、マルコの「自分の弟子のうち二人を遣わして彼らに言った」に相当する部分を縮約したものと考えられる。その後、「師匠」が家の主人に伝える言葉などについては マタイ 26 章 18-20 節との対応が認められる。ここですでに、単一の福音書を連続的に翻訳するのではなく、複数福音書の表現を組み合わせる編集が見られる。

最後の晩餐と弟子への教え

裏切りの予告とルカの記事の挿入

弟子の一人による裏切りの予告は、基本的にはマタイ 26 章 21-25 節に対応する。しかし、「食べている時、彼は言った」に続いて、ルカ 22 章 14-15 節に対応する受難への言及が挿入されている。また、マタイ 26 章 24 節に対応する部分では、「御パッション」に「スキリツウラに見えける如く」とあり、イエスの死が聖書に記された出来事であることが明示される。このように「御パッション」では、原文の意味を説明的に展開している場合もある。

仕える者についての教え

「誰が最も偉いか」をめぐる弟子たちへの教えはルカ 22 章 24 - 27 節に対応する。25 節では、ヴルガタの *reges gentium* (「異邦人の王たち」) が「人間の帝王」とされており、対象が一般化されている。さらに注目されるのは、続く *qui potestatem habent super eos benefici vocantur* (「彼らの上に権力を有する者たちは恩人と呼ばれる」) に対応する箇所が、「その中に威勢ある輩は果報いみじきと呼ばれるものなり」とされていることである。ここでは *benefici* の「恩人」という意味がそのまま訳されず、「果報いみじき」という社会的な栄達ないし幸運を表す表現に置き換えられているように見える。*benefici* と「果報いみじき」との意味的距離は大きく、この訳語がどのような過程で成立したのかは、ヴルガタ本文だけでは説明しにくい。ギリシア語本文も *εὐεργέται* (恩人) とするため、これはヴルガタとギリシア語の本文差によって生じたものでもない。中間となった翻訳本文の有無、およびキリシタン時代の「果報」の語義を含めて、別途検討する必要がある。

続く十二部族への裁きについての言葉はルカ 22 章 28-30 節、シモン・ペトロに対する予告はルカ 22 章 31-32 節に対応する。ただし、ルカにおいて連続しているペトロの死ぬ覚悟と躓きの予告は、「御パッション」ではここで続けられない。ヨハネ福音書による洗足の記事と最後の晩餐の記事がその間に挿入され、躓きの予告は後に改めて語られる。このような配置からも、「御パッション」の編者が単に各福音書の記事を並べたのではなく、一つの物語として再配置していることが分かる。

洗足

洗足そのものはヨハネ 13 章 1 - 5 節、ペトロとの対話は 13 章 6 - 11 節に対応する。この箇所では、まず記事冒頭の時間表現が注目される。「御パッション」は「晩炊過ぎてのち」とするが、ヴルガタ 13 章 2 節は *Et cena facta* とするのに対し、NA28 は *Καὶ δείπνου γινομένου* (食事が行われている時) とする。「晩炊過ぎてのち」という表現は、現行ギリシア語校訂本文よりもラテン語本文の理解に近い。一方、13 章 10 節ではヴルガタが *lotus* (洗われた) と *mundus* (清い) を区別するのに対して、「御パッション」は両者を「潔き」「潔けれども」と表現しており、原文の語彙的区別を日本語では一語に集約している。続くイエスの教えはヨハネ 13 章 12-15 節に対応するが、「御パッション」はヨハネの一連の教説を途中で打ち切り、再び最後の晩餐へ移行する。

聖餐

聖餐の記事では、マタイ 26 章 26 – 29 節が主要な枠組みを提供している一方、ルカ 22 章 19 節の「わたしを記念するためにこれを行え」に相当する「汝達我を思ひ出だすためにかくの如く致されよ」が挿入されている³。すなわち、ここでの調和は福音書ごとの記事を大きな段落単位で接続するだけでなく、一つの発話の内部に別福音書の一句を取り込むという文レベルの編集にまで及んでいる。

ゲツセマネと逮捕

ケドロンの躓きの予告

最後の晩餐后、「御パッション」はヨハネ 18 章 1 節に対応するケドロンの記事を置く。その後、マタイ 26 章 31-35 節に相当する弟子たちの躓きの予告が続く。ただし、マタイ 26 章 33 節に対応する箇所では、ペトロの発言にルカ 22 章 33 節の影響が見られる。また場面がすでにケドランへ移されているため、マタイに存在するオリーブ山への言及は省かれている。この部分は、「御パッション」の編集方法をよく示している。異なる福音書の記事を接続した結果生じる 場所や時間の重複を調整し、一つの連続した場面になるよう再構成しているからである。

ゲツセマネ

ゲツセマネの記事は、福音書間の調和はさらに細かな単位に及んでいる。マタイ 26 章 36-46 節およびマルコ 14 章 32-42 節を中心としながら、ルカ 22 章 43-45 節の記事を取り込んで構成されている。たとえば、マタイの「ペトロとゼベダイの二人の子」に対して、「御パッション」ではマルコと同じく「ペトロとヤコブとヨハネ」と人物名が明示される。また「恐れ悲しき御心を受け始めた給ひて」に相当する表現も、恐れを明記するマルコの記事との近さを示す。「御パッション」の「悲しみの余りに両眼重くなりて眠られければ」という一文のうち、「悲しみの余り」はルカ 22 章 45 節の *prae tristitia* に、「両眼重くなりて」はマタイ 26 章 43 節の *oculi eorum gravati* にそれぞれ対応する。このように、ここでは異なる福音書の表現が一文の内部で結合されている。また、ルカでは天使の出現、血の汗、眠る弟子たちの順に語られるのに対し、「御パッション」では眠る弟子たちの描写を先に置き、その後に天使と血の汗を配している。したがって、この箇所は単なる諸福音書の記事の継ぎ合わせではなく、語句の融合と出来事の再配列を伴う編集的調和の例とみることができる。さらに、「御パッション」では弟子たちを起こす場面についても、共観福音書の記事がそのまま保存されているわけではなく、「ゼズス 汝達何とて眠られけるぞ。立ち上りて番せられよ」といった形に再構成されている。なお、ルカ 22 章 43-44 節は 現代のギリシア語本文批評において本文上の問題が論じられる箇所であるが、ウルガタには含まれている。

³ただし、同じ *hoc facite in meam commemorationem* はコリント 11.24 にも見られ、11.25 にも類似する記念命令があるため、この一致だけからルカ福音書の直接利用を断定することはできない。ただし、本作品が四福音書から受難記事を選び集めたものとして構成されていることから、ここではまず ルカ 22.19 との対応として扱う。

逮捕

逮捕記事は、「御パッション」の中でも特に複雑な編集が認められる箇所である。物語の骨格にはマタイ 26 章 47 節以下が用いられるが、その途中にヨハネ 18 章 3-9 節の記事が大きく挿入される。その後、ユダに対するイエスの言葉にはルカ 22 章 48 節、剣を用いる場面にはヨハネ 18 章 10-11 節、剣を収める教えにはマタイ 26 章 52-56 節が利用される。さらに、傷つけられた者の癒しについてルカ 22 章 51 節、逮捕者への言葉についてルカ 22 章 53 節、逃走する若者についてマルコ 14 章 51-52 節が加えられる。したがって、この場面では四福音書すべての記事が一つの出来事の中に統合されている。

さらに、逮捕場面には単なる福音書間の調和とは異なる編集的改変も認められる。イエスが弟子たちを逃がした理由について、「御パッション」は「これ我に賜はる者を一人も失はざるとのスキリツウラのポロヘシヤを遂げさせられんがためなり」と説明する。しかし、対応するウルガタのヨハネ 18 章 9 節は *ut impleretur sermo quem dixit*（「彼が語った言葉が成就するため」）とするのみで、これを「聖書の預言」とはしていない。したがって「スキリツウラのポロヘシヤ」はヨハネ 18 章 9 節の逐語的な翻訳ではなく、イエス自身の言葉の成就を「聖書の預言の成就」として読み替える説明的ないし解釈的な改変である。なお、この改変については、ヨハネ 17 章 12 節との関係も検討を要する。同節には *quos dedisti mihi custodivi et nemo ex his perivit ... ut scriptura impleatur* とあり、「与えられた者を失わない」という 18 章 9 節と類似する表現と、「聖書が成就するため」という成就定型が同一節に現れる。このため、「御パッション」の表現がヨハネ 17 章 12 節の影響を受けた可能性は考えられる。ただし、直接的な混交であるか、中間資料ないし注解的伝承を介したものかは、現段階では確定できない。

「如何に親しき仲、何の故にか来られけるぞ」という言葉は、マタイ 26 章 50 節のウルガタ *“Amice, ad quid venisti?”* に対応すると考えられる。また、「人の子」に相当する語が「ビルゼンの子」と訳される点は、キリシタン聖書翻訳の特色としてすでに米井力也によって詳しく論じられている⁴

ユダヤ当局による裁判とペトロの否認

ユダヤ当局による裁判

捕縛後の記事では、まずヨハネ 18 章 13 節、15 – 16 節および 19 – 24 節が用いられ、アンナスへの連行、ペトロともう一人の弟子の追従、アンナスによる尋問とイエスへの打擲、カイアフアへの送致が叙述される。続くカイアフア邸での審理は、マタイ 26 章 57 – 68 節を主要な枠組みとしつつ、マルコ 14 章 53 – 65 節の要素を組み込んでいる。とりわけ、神殿についての証言における「デウスのテンポロ」や、イエスの「ご辺云はるるなり」という応答はマタイ本文との対応が強い一方、証言の不一致やイエスの目を覆って打つ描写にはマルコ本文との対応が認められる。

受難記事全体ではマタイが主要な骨格を提供しているとみられるが、裁判記事についてはルカの比重をより大きく評価する必要がある。とりわけ「御パッション」は、夜間の尋問とは別に夜明けの会議を設け、そこでキリストおよび神の子

⁴ビルゼンの子ーキリシタン聖書翻訳の方法、米井力也、国語国文、59 巻 5 号、pp.1-18 頁、1990。

であるかを問う一連の尋問を記しており、これはルカ 22 章 66 – 71 節の構成に対応する。また、ピラトに対する「民衆を惑わせる」「カエサルへの貢納を禁ずる」「自らをキリスト・王と称する」という告発もルカ 23 章 2 節に対応する。したがってルカは、この部分では特殊な挿話を補うだけではなく、ユダヤ側の朝の会議からローマ総督への政治的告発へと至る裁判叙述の構造そのものに関与している。

イエスへの暴行

暴行の記事は基本的にはマタイ 26 章 67-68 節に対応するが、イエスの目を覆うという描写にはマルコ 14 章 65 節およびルカ 22 章 64 節との対応が認められる。

ペトロの否認

ペトロの否認は マタイ 26 章 69-75 節が基本的な骨格となっている。しかし、「火にあたって居られけるに」という描写には、マルコ 14 章 67 節やルカ 22 章 56 節との近似が見られる。また「別の下女」が登場する点はマタイに特徴的である。さらに、ペトロを問い詰める人物が「ポンチヒセの郎等の一族」であるという描写は、ヨハネ 18 章 26 節に由来し、イエスが「ペドロを見返り給へば」という場面は ルカ 22 章 61 節に由来する。したがって、ペトロの否認についても、マタイの記事を骨格としながら、他の三福音書の特徴的な描写を挿入する方法が採られている。

ピラトゥスとヘロデによる裁判

ピラトゥスへの引き渡しとユダの死

ピラトゥスへの引き渡しは マタイ 27 章 1-2 節に対応する。ただし、「彼に対して協議をした」という簡潔な表現に対して、「御パッション」はその協議内容を詳しく説明し、先に語られた裁判記事の一部を再提示する。続くユダの死はマタイ 27 章 3-10 節に依拠する。

ピラトゥスの最初の尋問

ピラトゥスによる尋問では ヨハネ 18 章 28-38 節前半の記事が大幅に採用される一方、告発の枠組みにはルカ 23 章 2-5 節との関係が認められる。この箇所は、ルカの記事によって裁判の進行を作り、その内部にヨハネ特有のイエスとピラトゥスとの対話を組み込んだものと考えることができる。

ヘロデ・アンティパス

ヘロデのもとへ送られる記事は ルカ 23 章 6-11 節に由来する。「白き衣装」という表現は、ヴルガタの ‘veste alba’ とよく対応する。したがって、「白」という訳語はヴルガタ本文によって直接説明することができる⁵。一方、ルカ 23 章 12 節の、ヘロデとピラトゥスとその日に友人となったという記事は省略されている。

⁵NA28 ではこの箇所に λαμπρός が用いられており、ヴルガタの ‘alba’ とは語義上の差がある。

再びピラトゥスの前へ

ヘロデから戻った後の裁判には ルカ 23 章 4-15 節とマタイ 27 章 12-14 節が利用されている。続くバラバの選択は 主としてマタイ 27 章 15-23 節に対応するが、バラバについての説明には複数福音書の記事が統合される。「盗みをし、人を殺し、隠れなきバラバス」という人物像は、ヨハネ 18 章 40 節の「強盗」、マタイ 27 章 16 節の「名高い囚人」、ルカ 23 章 19 節の「反乱と殺人」といった情報を組み合わせたものと理解できる。また、ピラトゥスの妻に関する場面では、マタイ 27 章 19 節の「夢」という語を逐語的に訳すのではなく、「過ぎし夜その善人につき様々の難儀を堪えつることあり」とその内容を説明する形になっている。十字架刑の決定は マタイ 27 章 24-26 節に対応するが、「十字架につけるため」という説明は省略される。

兵士による嘲弄から十字架刑まで

兵士たちによる嘲弄は マタイ 27 章 27-30 節を基本とする。その際、イエスの右手に持たせる「葦」は、「御パッション」では「竹」と訳される。この種の訳語は、日本の読者に理解可能な具体物へ置き換える翻訳方法として注目される。その後、「御パッション」は再びヨハネ福音書を大きく利用する。ピラトゥスによる再度の無罪宣言はヨハネ 19 章 4-7 節、権力についてのイエスとの対話は 19 章 8-12 節、死刑要求が最終的に貫徹される場面は 19 章 13-15 節に対応する。とりわけ 19 章 15 節のウルガタ *tolle tolle crucifige eum* に対して、「御パッション」は「そこ退け給へ、そこ退け給へ、クルスに架けられよ」とする。

ゴルゴタへの道と十字架刑

ゴルゴタへの道

十字架を負わせる場面では マタイ 27 章 31-32 節またはマルコ 15 章 20-21 節に対応する記事と、ルカ 23 章 26-32 節の記事とが統合されている。しかし、「クルスを担げさせ奉り」という表現には、ヨハネ 19 章 17 節の「イエス自身が十字架を負った」という伝承との関係も考える必要がある。キレネ人シモンに関する「彼を傭い」という表現は、マタイ 27 章 32 節またはマルコ 15 章 21 節に対応する。エルサレムの女性たちに対する「大山に向って如何に山、わが上に覆ひかかれ」という言葉は、ルカ 23 章 30 節における山と丘への二つの呼びかけを一つに縮約したものと考えられる。一方、ルカ 23 章 32 節に言及される二人の犯罪者は、この段階では省略される。

十字架刑

十字架刑そのものは主としてマタイ 27 章 33-38 節を骨格としながら、ヨハネ、ルカ、マルコの記事が組み込まれる。「カルワリヨの山」という名称は、ウルガタのカルヴァリアという地名表現と関係する。「されば罪人の如くに (中略) 加えられ給ふ」という箇所は マルコ 15 章 28 節およびイザヤ 53 章 12 節と関係する。マルコ 15 章 28 節はウルガタ本文に存在し、「御パッション」にも対応する内容が見

られる。一方、この節は現代の主要なギリシア語校訂本文では本文として採用されていない。罪状書きが「エブライカ、ゲレカ、ラチイナ」の三言語で書かれたという記述はヨハネ 19 章 20 節に由来する。さらに、ルカ 23 章 34 節のイエスによる赦しの言葉も採用される。この節についてもギリシア語写本上の異読が知られているが、ウルガタには存在する。

十字架上のイエスの死

二人の強盗との対話はルカ 23 章 39-43 節、イエスの母と愛する弟子についての逸話はヨハネ 19 章 25-27 節に由来する。イエスの最後の場面では、ヨハネ 19 章 28-30 節が利用されるが、そこにルカ 23 章 46 節の最後の言葉が挿入される。その後、マタイ 27 章 51-54 節の神殿の幕、地震、百人隊長の記事が続く。さらに「その場に在合ひける者共、胸を叩きて帰るなり」はルカ 23 章 48 節に対応する。このように、イエスの死そのものについても、一福音書の死の場面を採用するのではなく、四福音書に分散する主要な言葉と出来事を一つに集約する編集方針が明瞭である。

証人・死の確認・埋葬

十字架刑を見守る女性たちの記事はマルコ 15 章 40-41 節に近く、女性たちのリストもマルコとの一致が強い。イエスの死を確認するため足を折ろうとし、脇腹を槍で刺す場面はヨハネ 19 章 31-36 節に由来する。埋葬記事は主としてヨハネ 19 章 38-42 節に基づくが、アリマタヤのヨセフについては他の福音書から情報が補われる。「ジョセフとて善者あり」はルカ 23 章 50 節、「頼母しく思ふ人なり」はルカ 23 章 51 節と対応する。また、ヨセフが「強き心を以て」ピラトゥスのもとへ行くという表現はマルコ 15 章 43 節に近い。さらに、ピラトゥスがイエスの死を不審に思い、百人隊長に確認させる場面はマルコ 15 章 44-45 節から採用されている。したがって、埋葬場面でもヨハネの記事を中心としながら、ルカとマルコによって人物描写と状況説明を補う編集がなされている。

墓の警備と物語の終結

「御パッション」の最後はマタイ 27 章 62-66 節の墓の警備の記事である。ここで特に重要なのは、物語が復活記事そのものへ進まないことである。「御パッション」には復活したイエスの出現も、空の墓を発見する女性たちの記事も存在しない。その一方で、墓の警備を求める祭司長たちが「三日の後に復活する」としたイエスの予告に言及する。そのため、復活そのものは描かれないものの、復活予告が第三者の言葉として物語の最後に置かれることになる。現存本文は Finis と明記して終わるため、少なくとも現存する形において末尾が偶然欠落したとは考えにくい。したがって、受難から埋葬および墓の警備までを一つの完結した単位として提示することが、この作品の意図であった可能性が高い。ただし、復活物語を持たないという点だけから、これをマルコ福音書の結末と直接結びつけることには慎重でなければならない。「御パッション」の最後の記事そのものはマタイ固有の墓の警備記事だからである。むしろ、ここでは「受難」を主題とする作

品として復活そのものを叙述範囲の外に置きつつ、マタイの墓の警備記事を利用することによって復活を間接的に予告したと理解する方が適切であろう。

「御パッション」における福音書編集の特徴

以上の比較から、「御パッション」の編集には少なくとも四つの特徴を指摘することができる。

第一に、物語の基本的骨格としてマタイ福音書が重要な位置を占めていることである。殺害計画、塗油、ユダの裏切り、聖餐、ユダヤ当局による裁判、ピラトゥスの裁判、十字架刑など、受難物語の主要な展開ではマタイとの対応が頻繁に認められる。

第二に、ルカおよびヨハネの独自伝承を積極的に取り込んでいることである。洗足、ピラトゥスとの詳細な対話、イエスの母と愛する弟子、槍による死の確認など、ヨハネ独自の記事が広範に採用される。また、弟子の中で仕える者についての教え、ヘロデによる尋問、エルサレムの女性たち、悔い改める犯罪者などルカ独自の記事も採用される。

第三に、マルコは物語全体の骨格というよりも、具体的な描写を補うために利用される場合があることである。ゲツセマネにおける「ペトロ、ヤコブ、ヨハネ」という人物名、逃走する若者、ピラトゥスによる死の確認などがその例である。

第四に、「御パッション」は四福音書を機械的に保存する福音書調和ではないことである。重複記事を整理し、必要に応じて一方を省略し、複数の記事を一文に圧縮し、場面の順序を変更している。したがって、その編集には受難物語を一つの連続した物語として理解しやすく提示しようとする意図が認められる。この点は、「御パッション」を失われたキリシタン版福音書の単なる断片としてではなく、独自の編集方針を持つ受難物語として考察する必要があることを示している。

おわりに

稿では、『スピリツアル修行』所収「御主ゼズ・キリシトの御パッションのこと」を四福音書と比較し、その本文が四福音書の記事をどのように選択し、組み合わせ、一つの受難物語として再構成しているかを検討した。「御パッション」は「四人のエワンゼリシタ」の記録から選び集めたものと自ら述べる通り、基本的には四福音書の記事を統合して形成された受難調和本文である。しかし、その編集方法を、特定の一福音書を底本とし、そこに他の福音書の記事を補足的に挿入するものとして単純に捉えることはできない。

現段階の照合では、マタイ福音書との対応が受難物語の各所に頻繁に認められ、作品全体において重要な位置を占めていることは確かである。しかし、場面によってはルカまたはヨハネの記事が叙述の構造そのものを与えている。たとえば裁判記事では、アンナスによる尋問にはヨハネ 18 章、カイアファ邸での審理にはマタイ 26 章およびマルコ 14 章、さらに夜明けの会議にはルカ 22 章 66–71 節が用いられており、複数の福音書を順次組み合わせることによって一連の裁判叙述が形成されている。したがって、「御パッション」の編集を「マタイを骨格とし、他福音書を補充する」という一方向的な関係だけで説明するよりも、場面ごとに異なる福音書の記事を選択して再構成する方法として理解する方が適切である。

さらに重要なのは、この調和が記事や場面を接続する水準だけで行われているのではないことである。聖餐では、マタイ 26 章の記事の中にルカ 22 章 19 節の *hoc facite in meam commemorationem* に対応する文言が取り込まれている。またゲツセマネでは、「悲しみの余りに両眼重くなりて」という一文の中に、ルカ 22 章 45 節の *prae tristitia* とマタイ 26 章 43 節の *oculi eorum gravati* に対応する表現が融合されている。さらに、ルカの記事について出来事の順序を変更する例も認められる。このように「御パッション」の編集は、記事・場面の選択だけでなく、一文・一句の水準での融合や叙述順序の再編成にまで及んでいる。

同時に、現存する「御パッション」のすべてを四福音書だけから説明できるとは限らないことにも注意する必要がある。ユダの死を「首をくくり、片腹破れて死しける」とする記述では、「首をくくり」はマタイ 27 章 5 節に対応するが、「片腹破れて」という要素は四福音書には見られず、使徒言行録 1 章 18 節に対応する伝承を想起させる。したがって、作品冒頭の「四人のエワンゼリシタ記録のうちより選び集めて翻訳せしものなり」という自己説明はその基本的な編集方針を示すものではあるが、実際の本文形成には、四福音書以外の聖書伝承、あるいはすでに複数の聖書記事を調和した中間資料が関与している可能性も考慮する必要がある。

以上から、「御パッション」は四福音書の文章を単に連結した資料ではなく、それぞれの記事に必要な応じて場面・文・句の水準にまで分解し、選択・融合・再配列することによって、一つの連続した受難物語として再構成した編集的な福音書調和であると評価することができる。ただし、その本文形成を四福音書の直接的な比較のみから完全に説明することはできない。

今後の課題として、第一に、「御パッション」成立当時に流通していた Vulgata 諸版およびその異読を調査し、現在参照している Weber-Gryson 版との異同を検討する必要がある。第二に、ポルトガル語による聖書本文、受難物語、福音書調和、さらにはラテン語の福音書調和やキリスト伝など、「御パッション」の編集に介在し得た中間資料との比較を進める必要がある。第三に、ユダの死のような四福音書外の要素について、それが聖書本文の直接参照によるものか、すでに形成されていた受難調和の伝承を介したものかを検討する必要がある。これらの調査によって、「御主ゼズ・キリストの御パッションのこと」が単に四福音書から作られたことを確認するだけでなく、キリシタン時代の翻訳者ないし編者が複数の聖書伝承をどのように読み、選択し、日本語による一つの受難物語として再構成したのかを、より具体的に明らかにすることができるであろう。

参考文献

- [1] 御主ゼズキリストの御パッションの事 ―キリシタン訳聖福音書の一例―, 海老沢有道, 聖心女子大学論叢, 2, pp.51-76, 1952.
- [2] Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem, Weber, Robert and Roger Gryson, eds., Amer Bible Society, 1990.
- [3] ビルゼンの子―キリシタン聖書翻訳の方法, 米井力也, 国語国文, 59 巻 5 号, pp.1-18, 1990.

- [4] バレト写本所収福音書抄註解 (1), 鈴木広光・梅崎光・青木博史, 文學研究, No. 94, pp.1-29, 1997.
- [5] バレト写本所収福音書抄註解 (2), 鈴木広光・青木博史, 文學研究, No. 95, pp.1-29, 1998.
- [6] バレト写本所収福音書抄註解 (3), 鈴木広光・青木博史, 文學研究, No. 96, pp.1-13, 1999.
- [7] 郷談 —Codices Reginensis Latini.459 の解釈から, 鈴木広光, 古典学の再構築, No.8, pp.76-77, 2000.
- [8] 新約聖書, 新約聖書翻訳委員会訳, 岩波書店, 2004.
- [9] スピリツアル修行 キリシタン文学双書・キリシタン研究第三十一輯, 海老沢有道編著, 教文館, 1994.
- [10] 福音書共観表, 佐藤研編訳, 岩波書店, 2005.
- [11] ギリシア語彩色共観表, 佐藤研編, 岩波書店, 2005.
- [12] Novum Testamentum Graece, 28.revidierte Auflage, herausgegeben vom Institut für Neutestamentliche Textforschung, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 2012.